

## 西寧と多巴

羽田明

デュ・ハルドのシナ帝國全誌に據ると西寧及びその附近の小都市トバ、Topa についてレヂス師(雷孝思)の手記に基いたかと思はれる次のやうな記述が見出される。「西寧の町は大きくはないが、商業では寧夏を凌駕してゐる。西韃靼地方 [Tartarie Occidentale (蒙古・西蒙古・青海・西藏等を含む漠然たる概念)] から來る總ての毛皮類はこの町もしくはトバと呼ばれるその附近の小都市で賣捌かれる。この小都市は位置も悪く、建物もかなり粗末であるが、大都市以上の價值があることは確かだ。と言ふのはそこでは外國のでも中國のでも欲しい商品は殆んど何でも——例へば種々の藥材、サフラン、棗、コーヒ等——手に入るからである。レヂス師がこの地方の地圖作製のためにここに滞在して

ゐた時、彼は三四人のカトリック教徒アルメニヤ人に會つた。彼等はこの町に住み着いて、蒙古人の處から仕入れて來る素晴らしい毛皮の店を開いてゐた。この町では家屋や店舗は、そこから僅か四里位しか離れてゐないが、西寧の町よりずっと高價である。不思議なことには、この町は西寧の清朝官憲の所管ではなく、喇嘛僧の所管である。この喇嘛僧は常にこの土地の領主である同一家族内から擇ばれるが、この家族は西番もしくは土番と呼ばれる民族中で最も著名な家柄である<sup>①</sup>。筆者は嘗て主として秦邊紀略の記事に基いて清初に西寧が「ただに河西の及ぶなきのみならず、秦塞と雖もこれに讓る」中國西北邊境の最大貿易基地たる地位を占め、その邊外の新興都市白塔兒(現在の大通縣)

多巴等に於いて西域貿易が繁榮した事實を指摘し、その原因を考へて厄魯特と清朝との關係を基礎として結び合はされた内外回教徒商人の活動に歸したことがあつたが、デュー・ハルドの言ふトバは即ち右の多巴（多壩）に相違ない。

ともあれ秦邊紀略卷一にも「世に在つては西寧の市口の鎮海・北川に在るを以て、惡んぞいはゆる多巴を知らんや」とか「世に傳ふる所の西寧の市口は皆鎮海・北川を謂ふ。即ち律例もまた載せて多巴に及ばず。豈市口となりて未だ久しからざるか」などと言つてゐるやうに中國では一般にその存在さへ知られてはゐなかつたにしても、馱載して往來するは則ち極西の回と夷なり」とか「西域の回夷の行賈をなす者は皆ここに於てす」とか云ふ言葉が已に示してゐる通り事實としては塞外貿易・西域貿易の中心的市場であり、アルメニヤの商人の來住する者さへ見られた程の多巴の名は西寧 *Saim, Selim, Zaim, Zium* へ *Ziling, Jiling* のそれと並んで塞外では意外に有名だつたらしい。例へば一七二三年（康熙五十二年）にシベリヤ總督のガーガリンが當時

ロシアで甚だ有名ではあつたがその位置さへ判然してゐなかつたエルケトの金鑛探險のために準噶爾部の領土を横斷して派遣したトボルスクの貴族グレゴリー・トルーシニコフ⑧一行の目的地は“*Selim y Daba*”に外ならなかつたし、康熙五十三年九月二日附で理藩院からガーガリンに送られた書翰には準噶策妄阿拉布坦のために一年間抑留されてゐた三十餘名のロシア隊商が東トルキスタン方面から⑨（噶斯）路に由つて西寧附近に到着したので、西寧駐在の理藩院侍郎はその多巴入市を許可したが、一行の請願に基いて理藩院では當時北京で滞在してゐたロシア官隊商と咨つた上彼等をセレンガ路經由で歸國させた始末が述べられてゐるやうである。④茲に言ふ噶斯路とは準噶爾部衆の青海西藏侵入經路として清朝が重視した噶斯口經由路の意味に違ひなく、噶斯口の名は青海の疆域に屬する同名の湖水から得たにしても、その位置は必ずしもその附近ではなく、寧ろロブ・ノール南岸のミラン（喀羌）から南下してアルティン・タグを越える要隘タシュ⑤・ダーヴァンに當つてよいであらう。

それでは西寧附近の互市場は何も多巴に限らなかつたのに、何故多巴が最も重要視されたのであらうか。これには少くとも二つの理由が考へられる。その一つは西寧の西北十里、「鎮海の西北五里に在り」秦邊紀略卷一と云はれてゐるけれども、實は前代以來の邊堡鎮海の東約一哩に在るらしい多巴は、秦邊紀略<sup>⑥</sup>一巻に西寧邊堡の條と西寧近邊の條とに重出する理由を注して「舊内地たるも今市口たればなり」と言つてゐるやうに、元來當然内地たるべきその位置にも拘らず清朝官憲の所管でなく、言はば租界の如き性質を有したことである。この點は同じく塞外貿易の中心であつたにしても白塔兒が「北川の口外二十里に在り」全く邊外の地であつたのとは大きな違ひである。四方の夷の往來織るが如きは舊北川に事へ今多巴に近づくを以てなり。惟ふに白塔兒は道主となるなり」と言ふのもこのやうな條件の相違から多巴が西寧地方の互市場として最も重要な地位を占めるやうになつたのに對して白塔兒が寧ろ通過貿易地化したことを意味するであらう。

その二つはデュ・ハルドは「位置も悪い」と言ふが、

事實としては鎮海から西寧に通じる道路上に位して塔兒寺（銀塔寺）に向ふ道路の分岐點に當つてゐるらしく、<sup>⑦</sup>土地の環境はともかくも交通の點では寧ろ秀れた位置を占めてゐたと思はれることである。塔兒寺は言ふまでもなく西寧の西南二十軒ばかりに在り、宗喀巴寺・クンブム Kumbum 等の名で知られてゐるこの地方第一の黄教の大喇嘛廟で年々多數の蒙藏人巡禮者を惹き附ける聖地である。秦邊紀略に據れば「市を司り平を持つるは則ち宰僧なり」とあり、西海蒙古の別部麥力幹所部の宰僧（宰桑）Jaisang 一、同じく達賴黃臺吉所部の宰僧一が多巴の市政を管理したと言ふが、デュ・ハルドに依れば喇嘛僧とされてゐて何れが正しいか明かでない。ただ蒙藏人の間では寺院僧侶の權力が強く往々俗權を凌ぐやうなこともあるらしいから、<sup>⑧</sup>多巴の互市場も最初は俗的首長の所領であつたものが後に喇嘛僧の管轄に歸し、寺廟（塔兒寺）の財源となつたのかも知れない。遊牧民の間では喇嘛廟が普通に集市の場所であり、廟會の際には特に大規模な集市が行はれることは贅言するまでもなからう。

いづれにせよ秦邊紀略<sup>一</sup>に「その地名昔に著れず、蓋し新創なり」と言つてゐるのもその起源の新しいことが疑ひのない多巴は西寧地方の互市場として短日月の間に非常な發達を遂げ、康熙の末年にはロシア人にまでその存在を知られるに至つたのであるが、その後ちは一轉して衰運を辿ることになつたらしい。一八八九年（光緒一五年）にこの地方を訪れたロックヒルが「トンガン叛亂までは重要な商業中心であつた」と言つてゐるところからすると、地方的市場としては永らく相當の重要性をもつてゐたやうであるが、少くとも塞外貿易・東西貿易の重要市場と云ふやうな地位は間もなく失つてしまつたらしい。乾隆初年の西寧府新志に已に一言も多巴に觸れるところがないと云ふ事實はこれを物語つてゐるであらう。では何故かくも速かに多巴が國際的商業都市としてのその地位を喪失しなければならなかつたのかと言へば、その理由は結局多巴をして忽ちに西寧地方の代表的互市場たらしめた事情そのものの解消に歸さねばなるまい。換言すれば何よりもまづその租界の特權の消滅であつて、その時期は

恐らく雍正の初年に溯るであらう。清朝では、嘗て指摘したやうに、噶爾丹の運命が漸く窮迫しつゝあつた康熙三十二年頃から已に多巴や白塔兒の住民を内地に編入しよう<sup>⑩</sup>と云ふ希望があつたやうであるが、その自殺後青海厄魯特の内附する者が相次ぎ、殊に雍正元年の羅卜藏丹津の亂を契機として青海全部が清朝の領土に入ると愈々豫而の計畫を實行して西寧衛を府に、碾伯千戸所を縣に改めると共に大通・永安・白塔の三城を築き、「各番族の外は青海蒙古に屬し、内は各寺の喇嘛に隸して歲ごとに添巴（貢賦）・番糧を納めてゐた」のを改めて清朝に馬匹もしくは糧石を貢納させ、地方の文武官の管轄下に置き、内外の交通の取締を強化する一方口外の交易場として新たに西川口外の日月山<sup>⑪</sup>丹噶爾（湟源）に互市を開く等種々の措置を講じたと云ふことであるから多巴なども當然この時以來清朝官憲の所管となり、從來の内地であつて内地でないやうな状態は改められたに違ひないのである。

かくて本來單なる互市場に過ぎず、その發達を専ら清朝と厄魯特、特に準噶爾部との政治的對立といふ偶

然的な理由に負ふた多巴は清朝勢力の發展によつて、必然的に地方的一商業中心に轉落し、その地位を丹噶爾に譲らざるを得なかつたが、これに反して青海・西藏方面に對する漢民族勢力の最前線基地であり、自己の經濟的・産業的基礎をもつ西寧そのものは、青海・西藏の征服に次ぐ準回二部の裁定といふやうな塞外情勢の著しい變化にも拘らず、東西貿易の上になほ相當の重要性を維持することができたのである。即ち中國西北部の最重要貿易基地たる管ての地位こそ喪つたにしても西寧の名は或る種の織物や手工業品の生産地として東トルキスタンから西北インドに至るまで廣く知られてゐたし、<sup>(14)</sup> キャフタではロシヤの重要な輸入品の一つである中國の大黃の集散地として有名だつたのである。<sup>(15)</sup> しかもキャフタ貿易においてロシヤへの大黃の供給を獨占したものが西寧を基地とするブカーラ人即ち東トルキスタンの回教徒トルコ族であつた事實こそは、元明から清初に及ぶまで西人の間で最も有名であつた肅州に代つて何時頃、如何にして西寧が新たに中國の代表的な大黃集散地となるに至つたかを示す

ものであり、更に想像を加へれば十八世紀の初期にヨーロッパで唱へられた大黃の Selenga 地方原産説にも西寧 Selin, Seling, 西寧河 Selin, Seling-gol の名稱との混同が含まれてゐるかも知れないと疑はれるのである。<sup>(17)</sup>

註

① du Halde: Description de l'Empire de la Chine, p. 40, t. I. 引用文中「バチス師がこの地方の地圖作製のために(ここ(多巴))に滞在してゐた時」とあるが、彼が甘肅地方の地圖作製に従つたことは知られてゐない。第四卷に收められた彼の西藏に關する覺書の抜粋にも西寧地方に滞在したことは全く見えない。ただこの記述が誰にもせよ皇興全覽圖作製當時(十八世紀初期)の耶穌會士の報告に基いてゐることは疑ふべくもない。

② 拙稿・回會阿布都里什特と西寧(「北亞細亞學報」・第三輯)

③ G. Cahen: Histoire des relations de la Russie avec la Chine, p. 148

本書の英譯本からの重譯である露支交渉史序説(東亞外交史研究會譯・昭一六)九二頁にただ「セリンやダーバ」と音譯を施してゐるばかりで中國名を擧げてゐないのは甚しい粗漏である。多巴はともかくとしてセリンが蒙古人や西藏人の西寧を呼ぶ名稱に外ならないことは有

名な事實であり、少くとも、原書には甘肅省の *Sining* (西寧) であることが明瞭に註記されてゐる。

④ *ibid.* p. 141 この場合にも前掲譯書(九〇頁)には瀛に多巴に大抜の譯字を宛てるやうな不用意を犯してゐる。この事件は異域錄 卷下期方備乘の末尾に載せられた副理探から噶噶林へ宛てた書翰中にも述べてゐるが、頗る簡略で多巴の名などは見えてゐない。

⑤ 噶斯路・噶斯口に關しては例へば(藩部要略 卷十 厄魯特要略二・熙嘯五十四年・五十五年・雍正元年・七年・十年等の條參照。欽定皇輿西域圖志 卷一 圖考・西域全圖や

安西南路圖には羅布淖爾の南に接して噶斯(淖爾)を描き、同書卷八疆域一・及び同書卷二水一の安西南路の條に據れば安西州外で色爾騰海の西七百里に在り、その周圍二百里ばかり、羅布淖爾の南二百里に當ると誌されてゐて、全く回部の領域内に在るものやうである。ところが

⑥ *ibid.* p. 141 の附圖(西藏圖)では *Obnor* はアルティン・ターグ以南に置かれてをり、中國分省新圖に據れば *Obnor* 格孜庫勒湖は明瞭に青海省に屬してゐる。この噶斯淖爾南岸の地がロブ・ノール地方から來る交通路と沙州(敦煌)方面から來る交通路の交會點に當ることは *ibid.* の附圖にも、ヘルマンの書 (*Die alten Seiden Strassen zwischen China und Syrien*) の附圖にも明示されてゐるところで、これはゆる噶斯口をこの附近に比定することも一應無理ではなささうであ

る。ただ雍正三年以後に繰返された清朝と準噶爾部との和議の交渉では哈密・噶斯口・克野(ケリヤ・且末)を結ぶ線をもつて清朝と準噶爾の境界を分けることがその條件の一つとなつてゐるから、(參照十朝東華錄雍正四年正月甲寅の條)噶斯口はアルティン・ターグ以南の噶斯淖爾附近に求めるよりもヘルマンの附圖にアルティン・ターグの要隘として誌されてゐる *Tasch-dawan* をこれに當てる方がより適當と考へられるのである。

⑦ *W. W. Rookhill; The Land of the Lamus, p. 109*

⑧ *ibid.*

⑨ イクウォール著 甘・肅西藏邊疆地帶の民族(昭・一八) 蓮井 一雄譯 一五五頁

西寧府新志 卷三 藝文に收められた康熙三十二年の郎談の請禁西寧寺廟諸番給蒙古納進疏に據れば、照得。先經西寧土司指揮同知李治奏請。請罷西海等處廟寺與邊外諸蒙古納進。白塔等處邊外諸民應進入邊各歸本境。部議。……臣等差官至西寧。同總兵官詳查此事。自順治十五年。因侍郎西圖同昂厄會同諸蒙古臺吉。議將托巴等諸寺廟諸番給達賴(黃臺吉)等諸蒙古納進。明朝時未有此事。……

とあり、元來多巴(托巴)は喇嘛廟——疑ひもなく塔兒寺——の寺領だつたのが、順治十五年の清朝と青海蒙古との交渉の結果後者の支配を受けることになつたものやうである。果してさうとすれば、一旦青海蒙古の領有に

歸した多巴は後ち再び寺領となつたのであろう。

⑨ W. W. Rockhill; *ibid.*

⑩ 前掲拙稿参照

⑪ 西寧府新志 卷三綱領、下雍正三年、四年等の條

藩部要略 卷十厄魯特要略三・雍正二年・三年の條

〔東科〕寺は湟源の西南二十五紆、日月山の中腹にある。……この爲に湟源のことを丹噶爾とも云ふ。〔青海概説。二九一頁

嘉慶一統志 卷二百 西寧府・山川の條、及び同書 卷五十六 青海厄魯特・建置沿革の條

⑫ 一八四五年（道光二五年）の一月丹噶爾を訪れたエックは「この町は小さいが、商賣のため各地から集まる旅人が甚だ多いから、歇家も多い。我々が宿を取つたのも回教徒の一家が管むその一つであつた」と言つてゐる（川上芳信譯・韃祖・西藏・支那旅行記・下卷三頁）この頃が最盛期であつたらしむ。（京亞研究所編・青海概説・七五頁）東干叛亂の後ちにこの町を訪れたロツタヒルに依れば戰禍は甚だしく、ために西藏貿易は大打撃を受けたやうであるが、この方面では依然として青海・西藏の蒙藏人の最大の交易場であり、回教徒に對する嚴重な取締にも拘らず少數ながら毎年ホータンやカシユガルの廻回商人も來訪したことが述べられてゐる。（*ibid.*, p. 109 seqq.）

⑬ プルシエヴァリスキー著 蒙古と青海・下卷三三九—三三九・高橋共譯

四〇頁〔モリーシングとトントキル Tonkir（丹噶爾）のチールによる補註（二）〕

⑭ M. P. S. Pallas; Voyages (traduits par M. Gauthier) p. 216

Klaproth; La frontière russo-chinoise. (Mémoires relatifs à l'Asie), p. 72

⑮ 松筠の綏服紀略（小方壺齋輿地叢鈔所收本）に據れば「恰克圖販賣大黃者獨有一家。係青海回民。俄羅斯最爲信服。他商販此。勿能售也」とあるが、バルラスに依れば、西寧の某ノカトラ人父子について同様のことが傳へられてをり、クラプロートに従へばハミ・トゥルファン・カシユガル・ホータン等各地のブカトラ人が西寧で大黃を販賣してこれをキャフタに販運するに過ぎず、必ずしも寄居の廻回ではなからしむ。

⑯ H. Yule and H. Cordier; Travels of Marco Polo, p. 217—8 Vol. I./H. Yule and H. Cordier; Cathay and the Way Thither, (2nd ed.) p. 291—2 Vol. I (Haji Mahomed's Account of Cathay) Baddley; Russia, Mongolia, China, p. 226

⑰ 拙稿・大黃のセレンガ地方原産説について（石濱先生還曆祝賀記念論文集）